

## 突然の電話

昭和49年6月初旬のある日のことでした。自宅の近所にあります幼児開発協会の代官山教室にいた私に、愛知県から電話がかかってきました。

その電話の内容は「脳障害児を持つ一人の父親だが、ドーマン博士の著書“親こそ最良の医師”を読んで、わが子にもぜひその治療を受けさせたいと思う。書物の中に先生のことが書かれてあったので、ぜひ先生に子供を診て頂いて、どうしたら良いかを指導してほしい。先生の指定する日時に指定する場所へ行くので、ぜひ頼む」ということでした。

おそらく、アメリカのグレン・ドーマン博士の書物の中に出て来た石井勲という名だけを頼りに、出版社へ問い合わせ、勤め先か自宅を教えもらって電話し、さらにその行き先を調べて一刻を争って電話してきたものでしょう。その声には、わが子を良くするためには、どん

な苦勞もいとわぬ真情が滲んでいました。

そこで私は「わざわざ東京まで出て来るには及ばない。私が行って診て上げよう。私はたびたび関西方面に出かける仕事があるので、その折、途中下車して貴方の家にお寄りする。それまでの間に、私の著書を送るから、それを一通り読んでおくように」と返事し、早束手紙と一緒に、『石井方式・漢字の教え方(学燈社発行)』を送ってやりました。

私の送った手紙に対して、折返し返事が来ました。それから、その脳障害児、愛子ちゃん(父親の希望もあって仮名にしました)のことで、手紙が交わされるようになりました。この手紙を中心に、その教育の仕方と、それによって愛子ちゃんがどのように変化していったかを、お知らせしたいと思います。